

Benesse 大学シンポジウム 2013

学生が大学の授業で身につけるべき**力**とは

—初年次教育における思考力育成の勧め—

2013 年秋、ベネッセコーポレーションによる、初年次教育における思考力育成をテーマとしたシンポジウムが開かれた。これからの初年次教育における思考力育成の重要性や、すでにそうした取り組みを行っている 2 つの大学の事例紹介、そして、1 年生から思考力を育成する意義について発表が行われた。また、登壇者による討論、質疑応答も行った。それらの内容を報告する。



第一部

基調講演

初年次教育における思考力育成の勧め—大学で学ぶために必要な力とは?—

国立教育政策研究所 高等教育研究部長 川島啓二

実践報告

思考力育成へのきっかけづくり—初年次教育の実践から分かってきたこと—

ベネッセコーポレーション 大学事業部事業開発課長 松本 隆

事例紹介

名古屋外国語大学 思考力を育成する「基礎ゼミ課題集」による全学授業

外国語学部 総合教養教授 石田勢津子

九州歯科大学 大学での学びとは何かを理解する「基礎教育セミナー」

口腔保健学科 口腔保健管理学講座准教授 吉野賢一



第二部

論点提供

初年次教育において思考力を育成する意義—課題と今後に向けてのヒント—

京都大学大学院 教育学研究科教授 楠見 孝

パネルディスカッション

大学における思考力育成を更に発展させるために

国立教育政策研究所 高等教育研究部長 川島啓二 京都大学大学院 教育学研究科教授 楠見 孝

名古屋外国語大学 外国語学部 総合教養教授 石田勢津子 九州歯科大学 口腔保健学科 口腔保健管理学講座准教授 吉野賢一

ベネッセコーポレーション 大学事業部事業開発課長 松本 隆



初年次教育における思考力育成の勧め

—大学で学ぶために必要な力とは?—

近年、主体的な学びを軸にした教育改革が進められ、思考力を育成する授業を行う大学が増えている。初年次教育においても、スタディ・スキルや学生の間関係構築を中心としたものから、思考力の育成を中心とした目標設定が必要だと、川島部長は提唱する。



国立教育政策研究所 高等教育研究部長 川島啓二

かわしま・けいじ◎京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。専門は高等教育論、教育行政学。芦屋大学助教授、国立教育研究所教育経営研究部高等教育研究室長を経て現職。日本高等教育開発協会会長、大学教育学会常任理事、初年次教育学会理事。

初年次教育で実施せずとも関心の高かった思考力育成

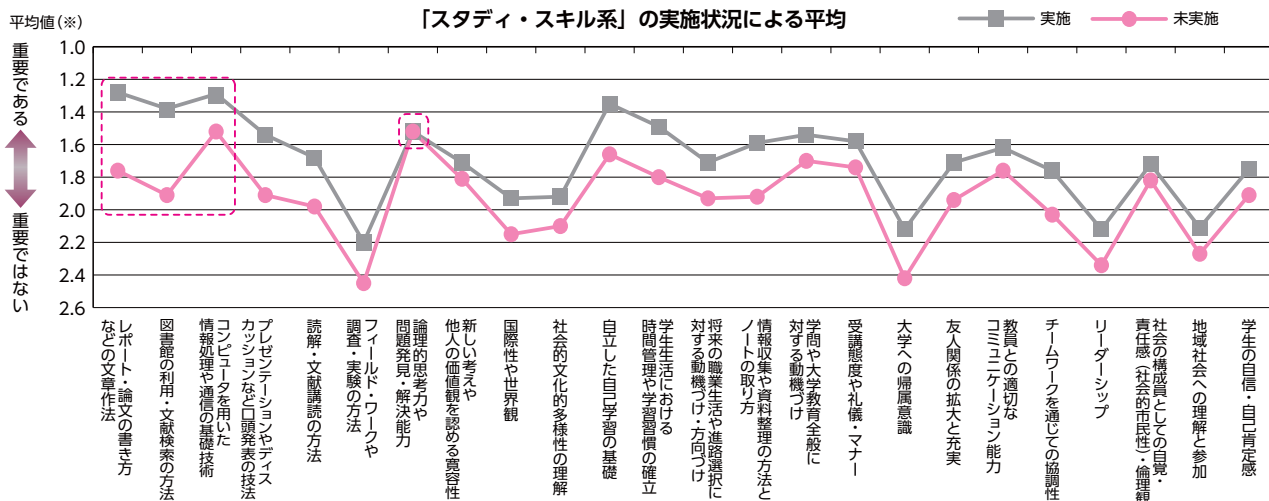
初年次教育に関心が寄せられ始めた頃、中心となる課題は「移行と適応」でした。高校生活から大学生活への移行を目的に、学習の動機付けや習慣形成を適切に行うことが重視されていたのです。『一年次（導入）教育の日米比較』（*）によれば、1994年度のアメリカのサウス・カロライナ大学の調査、2001年度の日本の私立大学学部長調査を見ても、初年次教育において思考力に関するプログラムは大変少ないのです。

国立教育政策研究所「大学における初年次教育に関する調査」（2007年）で初年次教育の選択肢にされている領域は、①スタディ・スキル系、②スチューデント・スキル系、③オリエンテーションやガイダンス、④専門教育への導入、⑤教養ゼミや総合演習など学びへの導入を目的とするもの、⑥情報リテラシー、⑦自校教育、⑧キャリアデザインの八つであり、思考力の育成は重視されていなかったことが分かります。

同調査では、「初年次教育を通じて学生が習得するものの重要度」について、スタディ・スキル系の実施状

況による平均値を比較しています（図1）。これを見ると、「レポート・論文の書き方などの文章作法」「図書館の利用・文献検索の方法」「コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術」などの定型的なスタディ・スキルは、スタディ・スキル系未実施大学よりも実施大学の方が重要と考える傾向がありました。一方で、「論理的思考力や問題発見・解決能力」については、実施・未実施を問わず重要だとする回答率が高くなっています。実施していないものの、思考力育成への関心や重要性の認識がそれなりにあったことが読み取れます。

図1 初年次教育を通じて学生が習得するものの重要度



*「1:重要である、2:やや重要である、3:どちらともいえない、4:あまり重要ではない、5:重要ではない」の5件法による平均値
出典/国立教育政策研究所「大学における初年次教育に関する調査」(2007)

*山田礼子著、東信堂

大学教育の変化に応じて 初年次教育も変わるべき

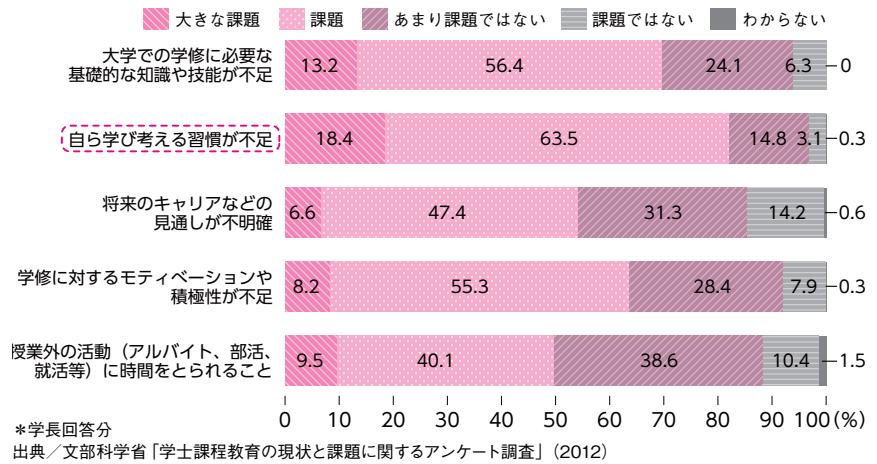
高等教育政策の焦点は「学修成果」から「カリキュラムなどの学士課程の枠組」へと発展し、今は「学生個々の学修時間やプロセス」が中心です。文部科学省中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、学生の「主体的に考える力」を打ち出しています。

では、大学の現状はどのようなのでしょうか。文部科学省が国公立大学の学長および学部長を対象に行った「学士課程教育の現状と課題に関するアンケート調査」（2012年）では、学生の学修成果を大学がどう感じているかが明らかになっています。「態度・志向性（例：自己管理能力、チームワーク、倫理観）」について「成果が出ている」（十分+ある程度十分）との回答は7割を超え、一方、「獲得した知識等を活用し、新たな課題に適用し課題を解決する能力」については「成果が不十分」（やや不十分+不十分）との回答が5割を超えていました。

更に、学生が大学で学ぶ際の課題には、8割が「自ら学び考える習慣が不足」と回答しました。学生の主体的な学びと思考力について課題を感じている大学が多いことが分かります（図2）。

大学はこうした課題にどう対応しているのか。ベネッセ教育総合研究所「大学生の学習・生活実態調査」（2012年）を見ると、授業経験の変化が浮き彫りになっています。2008年調査と2012年調査を比較すると、ゼミ・演習形式の授業の経験率に大きな変化は見られませんが、「グループワークなどの協同作業をする授業」「プレゼンテーションの機会を取り入

図2 学生が大学で学ぶに当たっての課題



れた授業」「ディスカッションの機会を取り入れた授業」など、思考力育成に関連する授業の経験率は高くなっていました。

初年次教育が始まった頃、「思考力」を身に付けることを目標とした授業はあまり見られませんでした。しかし、大学教育が変わりつつある今、初年次教育を「学びの『自己構築力』のための基盤形成である」と捉えるならば、当初の「移行と適応」ととどまらない目標設定が必要だと考えます。大学教育が変われば、初年次教育も変わるべきでしょう。

経済産業省が発表した「社会人基礎力」では、職場や地域社会で多様な人々と仕事をするために必要となる基礎的な力として、「前に踏み出す力（アクション）」「考え抜く力（シンキング）」「チームで働く力（チームワーク）」の3つを掲げています。更に、この中の「考え抜く力」の能力要素には、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力という具体例を出しています。社会でも必要とされるのは「思考力」なのです。

ただし、これは大学卒業時点に社会人として必要な力を述べたものです。大学の学びに何が必要か、社会で求められるベクトルとは別の視点で考える必要があると考えます。

主体的な学びに結び付く アクティブ・ラーニングを実施

そもそも、「主体的に学ぶ」とは具体的にどういうことか。授業の姿勢でいえば、授業への参加意識を持ち、予習・復習は教員の指示がなくても取り組むことが、「主体的に学ぶ」といえるでしょう。授業に触発されて授業外の学びに参加すれば、大学らしい教育効果が得られているといえますし、授業と関係なく、自分の将来に即した学びをしていけば、自律した学習者といえそうです。

この主体的な学びを導く方策としては、学習支援、初年次教育、シラバスの充実、予習・復習を前提とした授業、授業での問題提起、留学やボランティアといった多様な学習機会の提供などが挙げられます。また、有効な方策の一つには、アクティブ・ラーニングがあるでしょう。現在、授業にさまざまなアクティブ・ラーニングが取り入れられています。思考力育成に関連したこの方法を含め、学生を主体的な学びに導く教育を、初年次ではどのような手法で行うのか、それによってどのような思考力が養成できるのか、今後、更に詳しく検証していく必要があると考えます。

思考力育成へのきっかけづくり

—初年次教育の実践から分かってきたこと—

ベネッセコーポレーションでは、さまざまな講座の実践によって、初年次教育における大学での学びに必要なスキルの育成を支援している。その成果と課題を報告する。

ベネッセコーポレーション 大学事業部事業開発課長 **松本 隆**



まつもと・たかし◎高校向けのアセスメントの営業などを経て、2008年から現職。大学教職員向けに教学改革促進の提言・情報提供などを行う。

意見が出せない」という反省をし、思考力修得の必要性や大学4年間の学びの重要性に気がきます。

こうした気付きはアセスメントを用いても可能です。私たちは批判的思考力(*1)を測定するマーク式のテストを、2013年4月に新入生約8万人に対して実施しました。広告・新聞・論文などの素材に対し、資料や文章を正しく読み取れるか、情報の信頼性やロジックの正しさを判断できるか(推論)を確認するテストです。結果は想定通り「推論」の正答率が極端に低いというものでした。与えられた情報を読み取ることは出来ても、情報の真偽を判断し、自分で考えることに慣れていないのです。つまり、高校までの学習スタイルでは大学での学びに対応できないことが明らかになりました。この「出来なかった」結果を学生と共有することで思考力育成や大学での学びへの動機付けになると考えています。

まず失敗体験をさせ、動機付けを行う。これが初年次教育に必要な要素です。ベネッセとしてもこうした知見を基に、今後も取り組みの精度をより高めるためのプログラム開発・提供を進めていく予定です。

アクティブな経験が主体的な学びを促進する

ベネッセコーポレーションは2012年度、正課外を含む約7000コマの講座を大学に提供しています。その半数が初年次の講座です。また、約10万人に新入生調査を行いました。これらを基に、学生に主体的な学びを促すものが何かを探りました。

分析を行ったところ、高校時代に自分の考えを発表する経験やグループワーク、ディスカッションをよくしたという学生ほど、「楽な授業」ではなく「興味がある授業」を、「講義形式」ではなく「演習形式」の授業を選ぶことが分かりました。更に、高校時代に自分の意見や考えを発表した経験を持つ学生は、「論理的思考力」「文章作成能力」「幅広い教養」「コミュニケーションスキル」のいずれの修得にも力を入れる傾向が見られました。また、1年生で「論理的思考力を身に付けること」に力を入れた学生は、対人積極性、知的活動性において成長感を得て、また授業の役立ち感も高くなっていました。

つまり、「アクティブな学習を経験した学生は、大学の学びや思考力

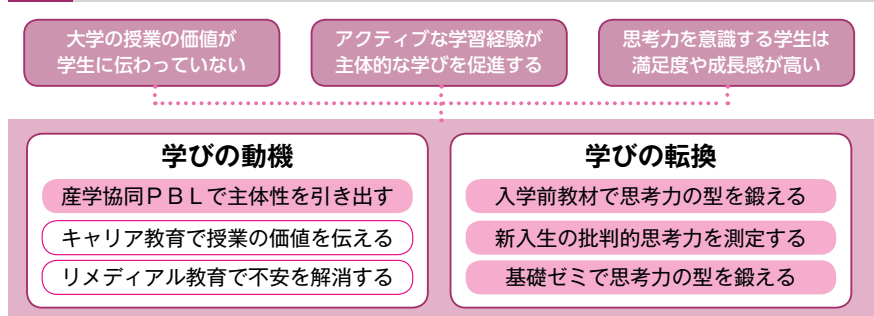
などのスキル修得に意欲的で、実際に大学で成長を実感している」のです。しかし、実際にはこうした経験を持つ高校生や大学生は少数。そこで重要となるのが初年次教育です。

失敗経験が思考力を身に付ける動機に

では、初年次教育ではどのような取り組みを行うべきなのでしょう。

そのヒントとなるのが、2010年度から私たちが行っている産学協同PBL講座です。この講座は知識やスキルがない新入生に、まずやってみることを推奨し、あえて失敗させ、学びやスキルの大切さに気付かせることを目的としています。実際、多くの学生は「企業の発信が理解できない」「知識がないと説得力のある

図 実践から見えたことと課題解決の方向性



*1 批判的思考力に関しては、P.29の楠見教授の論点提供をご参照ください

事例紹介1 名古屋外国語大学

思考力を育成する 「基礎ゼミ課題集」による全学授業

名古屋外国語大学外国語学部は、言語を扱う学部として思考力が重要であると捉え、1999年度から「基礎ゼミ」を1年生の必修科目とし、独自の教材を使って学生の思考力を育成してきた。

名古屋外国語大学
 外国語学部 総合教養教授 **石田勢津子**



いしだ・せつこ◎総合教養主任。名古屋大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士(教育心理学)。専門は教育心理学、教育方法論。

や文法上の誤りはもちろんチェックしますが、学生の個性を大切にしたいと添削を心掛けています。

そうした教員たちの英知が集約されているのが、現在の「基礎ゼミ課題集」です。学生用にはワークシートが添付され、教員用には指導マニュアルや解答例などが示されています。教員が毎授業提出する報告書は、次年度の授業改善に生かしています。

委員会を立ち上げ 授業をつくり上げる

言語には大きく二つの機能があります。一つは伝達、もう一つは思考です。言語を扱う外国語学部では、思考力、読解力、表現力の向上は専門科目の学習に必要不可欠と考え、1999年度に1年生の必修科目として「基礎ゼミ」を開講し、それらの育成に取り組んでいます。

現在は、図のように1年生前期「基礎ゼミⅠ」で文章の読解力と表現力

を、1年生後期「基礎ゼミⅡ」で論理的思考力を主に訓練し、体系的に学べるカリキュラムとしています。

1クラスは約20人で全34クラス、総合教養の専任教員10人と多数の非常勤講師が授業を担当しています。

共通教材の「基礎ゼミ課題集」は本学のオリジナルです。開講当初は皆が初めて行う授業であったため、委員会を立ち上げて、意識の共有化を図りました。教材は各自が作成し、授業で使い、その成果を委員会に持ち寄り、どのような教材が適している

か、どのような授業にするかを話し合いました。評価方法も重要な検討課題でした。学生にどうフィードバックをするかが、学生の意欲や能力育成に影響を及ぼすからです。注意して見ているのは、ポイントを押さえて読解をしているか、言いたいことを自分自身で理解して書けているかです。誤字脱字

読解力、思考力、表現力は 学びの土台となる力

「基礎ゼミⅠ」1回目の授業ではブリテストと自己点検アンケートを行い、到達目標を示すとともに、自分の力の現在地をつかむ場としています。そして、「基礎ゼミⅡ」の最後の授業でポストテストと自己点検アンケートを行い、自己到達度を確認させます。例えば、2009年度のブリテストからポストテストへの伸びを見ると、マークシート方式の問題、要約および意見記述問題で、いずれも有意な伸びが見られました。

自己点検アンケートでは、「基礎ゼミで学んだことが他の授業で役立った」という声がよく挙がります。専門科目ではさまざまな知識・技能を学びますが、それらを生かす読解力、思考力、表現力は、専門科目を学ぶ前の1年生で学ぶことが重要だと痛感しています。これらの力は自然に身に付くものではなく、ある程度は訓練が必要です。型を教えつつも、マニュアルに頼るのではなく自分で考える力が付くように、今後も授業改善を重ねながら初年次教育に力を入れていきたいと思っています。

図 「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」年間の授業の流れ

基礎ゼミⅠ (前期)	基礎ゼミⅡ (後期)
ブリテスト・自己点検アンケート	1 後輩に基礎ゼミⅠの授業紹介文を書く
文章 ①様々なタイプの文章	2 文章 ①要約・解釈・意見
②主観的文章・客観的文章	3 ②感想と意見
要約 ①文章のコアを捉える	4 意見 ①主張(結論)と論拠(理由)
②構造を読み解く	5 ②事実と推論(1)
③論点の軽重を計る	6 ③事実と推論(2)
復習 (意見文の要約)	7 ④事実と推論(3)
解説 ①グラフの読み取り	8 ⑤他人の意見から始める
②報道記事と解説記事(1)	9 議論 ①論点(争点)を整理する
③報道記事と解説記事(2)	10 ②他者と議論する(1)
伝達 ①絵を言葉で表現する	11 ③反論の仕方について学ぶ
②話の論点を聞き取る	12 ④他者と議論する(2)
③聞き手に分かりやすく話す	13 ⑤反論の可能性を考える
④情報伝達としての要約	14 論考 ①反論を予想する
復習 自己表現課題	15 ポストテスト・自己点検アンケート

*発表資料を基に編集部で作成

大学での学びとは何かを理解する 「基礎教育セミナー」

九州歯科大学は、中期計画の中で初年次教育の充実を掲げ、その施策の一つとして2013年度に1年生の必修科目「基礎教育セミナー」を開講した。検討から実現までの過程、そして成果を報告する。

九州歯科大学 口腔保健学科
口腔保健学管理学講座 准教授 **吉野賢一**

よしの・けんいち◎九州大学農学部卒業。九州歯科大学助手、京都大学霊長類研究所特別研修員などを経て、2010年度から現職。



全学に「歯科医療人に必要な思考力・人間関係能力を育む初年次教育を実施すべきである」と提言をし、2013年4月に「基礎教育セミナー」を開講することを目指し、本格的な準備に入りました。

開講前に模擬講義を実施 教員の目線合わせを行う

「基礎教育セミナー」は学生8人に教員1人で行います。本学には助言教員という担任制度があり、基本的に助言教員が授業を担当します。教材は、批判的思考力と論理的に表現する力を育成する教材を使用。開講前の3月に担当教員約40人を集め、外部の講師がファシリテータを務め、教員が学生役となる模擬講義と、その体験を基に話し合うグループワークを開きました。担当教員の専門分野は英語や体育、生理学、臨床など多岐にわたるため、この授業で何を目的にどのようなことを行うのかという目線合わせをする重要な機会となりました。

まだ前期の講座が終了しただけの段階ですが、教材付属のプリテストとポストテストの結果を比較すると、学生の思考力は確実に高まっています。また、教員からは、学生の考えや資質がよく分かり、2年生以降の指導に生かされると高い評価を得ています。一方で、授業準備の負担や指導のばらつきを不安視する声もありました。

次年度以降も、教員の理解を求めるとともに、学生が学習に意欲的に取り組める手法を探っていきたいと思っています。

全教員によるFDを重ね 初年次教育の共通理解を図る

本学は、歯学科（入学定員95人）、口腔保健学科（入学定員25人）から成る大学です。学生の大半が歯科医師や歯科衛生士を目指しており、比較的明確な目標を持って入学します。そうした学生に歯科医療人としての高い志を育むために、中期計画で初年次教育の充実が掲げられました。

この実現を目指し、2010年、教務部会に歯学科3人、口腔保健学科1人、計4人の教員による「初年次教育ワーキンググループ」を立ち上げました。全学の教員に対して初年次教育への意識を高める活動をするとともに、本学の初年次教育にふさ

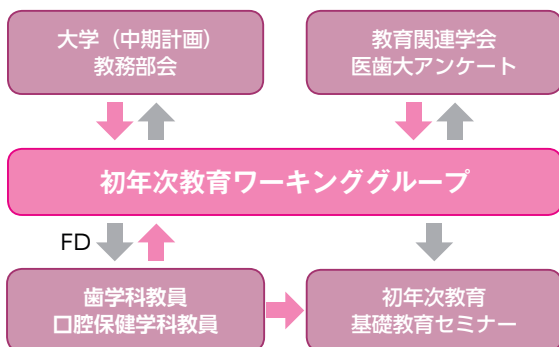
わしい内容を検討することとなりました（図）。

ところが、メンバー全員が初年次教育に関する知識がほとんどなく、教育関連の各学会に参加し、勉強するところから始めました。他大学の状況を参考にするため、全国の医歯系大学に初年次教育に関するアンケートも実施。こうして得た情報は全教員対象のFDを介して全学に提供しました。歯科医師国家試験では思考力を問う出題がされるようになっていたため、それも併せて初年次教育の必要性を訴えました。

全学で意識の共有化を図るため、初年次教育のFDを年3回実施しました。2011年3月、初年次教育の問題点を抽出し、それに対する具体的方策を考えるグループワークを、2012年3月には歯科医学教育における初年次教育について考えるグループワークを行い、各教員に何が出来るのかを問い掛けました。

こうして全学で話し合った結果を基に、2012年10月、初年次教育ワーキンググループは

図 「基礎教育セミナー」検討の流れ



*発表資料を基に編集部で作成

論点提供

初年次教育において思考力を育成する意義

—課題と今後に向けてのヒント—

批判的思考力は、大学における学習の基盤となる思考力であり、初年次教育での育成が重要だという。そのための有効な手立てや教材にはどのようなものがあるのか具体例を示した。

京都大学大学院
教育学研究科教授 **楠見 孝**



くすみ・たかし◎学習院大学大学院博士課程中退。博士（心理学）。東京工業大学大学院社会理工学研究科助教授などを経て、現職。

学士課程全体を通して 思考の手順を定着させる

ものごとを批判的に分析し、思考する力は、社会で求められる汎用的なスキルの一つです。文部科学省の中央教育審議会の答申でも、専攻分野にかかわらず大学教育で習得させるべき力であり、学士力の構成要素と位置付けられています。また、大学の学習、特に専門的な学習では主体的に課題を見付け、解決する必要がありますから、初年次から批判的思考力の育成に力を入れることで、学生の学びは豊かになるでしょう。

批判的思考には、情報の分析→証拠の検討→推論→問題解決のための

行動という手順を踏むことが大切です。これは一朝一夕には身に付きませんから、学士課程全体を通して体系的に指導する必要があります(図)。初年次に導入科目で思考スキルを指導し、2年次以降は専攻する学問分野に深化した課題で活用に重点を置きます。そして、ゼミや卒業論文などで専門的な内容に取り組むことで、定着させるのです。

複数の評価方法を行い 定着度を正しく把握

初年次に批判的思考力を育成するためには、どのようなことが求められるのでしょうか。課題と感じている先生方が多いと思われる2点について、私の考えをご紹介します。

一つめは、教え方についてです。思考のスキルが学習に役立つことを、学生に実感させましょう。テキストだけでなく、先生方の教育目標に応じて作成したワークシートを併用すると効果的だと思います。学生が受け身に

ならないように、グループワークや討論などを取り入れることも方法の一つです。

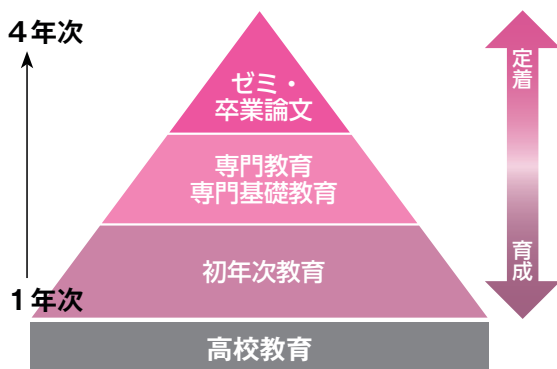
また、読む活動、書く活動をたくさんさせてください。読む活動では客観的証拠がどこにあるかに着目して文献を読ませること、書く活動では書いたものを学生同士で互いに批評させることが大切です。

初年次の課題の二つめは、思考の手順の定着度をどのように見取るかということです。学力に比べると測りにくい面があると思います。方法を見ていきましょう。

多肢選択テストは、それぞれの手順をどの程度理解しているかを判断するのに適しています。他の学部や大学と設問をそろえやすいので、成績を広い範囲で比較することも出来ます。記述式テストは、手順を総合して用いる力を見取るのに有効です。学生が自己採点や相互採点をすれば、理解を深められますし、教員の負担を軽減します。グループワークや討論などをさせた後では、学生に自己評価と相互評価の両方をさせましょう。ワークシートやレポートなどを課す場合は、ポートフォリオやファイルを用意させ、自分の学習履歴を振り返らせるようにすると学びが何倍にもなるはずです。

また、これらの評価方法を組み合わせることで、より正確に学生の定着度を把握できるようになります。批判的に思考することに慣れていない学生が多い初年次には、意識して複数の方法を用い、学生の課題を明らかにすることが特に重要です。

図 批判的思考力の体系的育成



*発表資料を基に編集部で作成

大学における思考力育成を 更に発展させるために

初年次教育において思考力を育成するためのポイントとは何か。
登壇者4人に発言していただいた内容をそれぞれまとめた。



国立教育政策研究所 高等教育研究部長・川島啓二 ▶ 「思考力はあらゆる教育活動で育成できるものです。ただ、座学で得た知識を実験で活用する、インターンシップでは職業観を育むというように、活動目標はその特徴に応じて設定した方が良いと思います。その方が、学生が取り組みやすいからです。また、思考力育成の取り組みと協同学習は学習や評価の方法などに共通点がありますが、現状では別々に研究されることが多いようです。双方が成果と課題を共有すれば、今まで以上に効果的な取り組みが出来るのではないかと期待しています」

名古屋外国語大学 外国語学部教授・石田勢津子 ▶ 「全学を挙げて思考力を育成するためには、方針だけでなく、使用する教材についても、教員間の合意形成が必要だと考えます。担当する教員の専門分野はさまざまですので、それぞれの研究分野を教材の内容に反映することは難しいからです。授業で育成したい力に応じ、なおかつ学生が関心を持つような内容にすることが大切です。また、ど

うしても少人数の授業となるので、非常勤講師の協力が重要になります。『基礎ゼミ』の方針をしっかりと伝え、授業検討会への出席も求めています。自分でアイデアを出せば当事者意識が高まり、熱意も生まれるはずです。講師控え室で非常勤講師同士が『基礎ゼミ』について自主的に話し合う姿が見られるようになりました」

九州歯科大学 口腔保健学科准教授・吉野賢一 ▶ 「アンケート結果を見ると、大学で思考力を伸ばそうとする取り組みに対して、大学教員から『高校までの段階で育成すべきではないか』『思考力は自然に習得させるべきであり、意図的に育むものではない』といった意見が出ています。本学でも、取り組みを始めるに当たり、同じような意見が出されました。そこで、現実には、思考力を身に付けないうまま入学する学生がいること、ただ授業をするだけでは、そうした学生に思考力を育成できないことなどを、FD活動や教授会などで繰り返し説明しました。大半の教員は私たちの説明に納得し、同意してくれましたが、全員の合意を得るには至り

ませんでした。しかし、そこにこだわってはいは、何も先には進みません。合意してくださった先生方と準備を進め、とにかく授業を始め、成果を出すことを優先させました。学生の成長を実績として示すことが、何よりも説得材料になると思います」
京都大学大学院 教育学研究科教授・楠見孝 ▶ 「高校でも、思考力をつけるための活動に力を入れている学校はあります。例えば、滋賀県立膳所^{ゼゼ}高校では、『総合的な学習の時間』に『探究』という科目を設けて、生徒は1、2年生で、自ら課題を設定し、調べて、結果をまとめる問題解決学習に取り組んでいます。生徒一人ひとりの関心に応じながら、生徒が思考力を鍛える機会として、調べ学習やグループ活動を授業に取り入れているのです。確かに今はそうした高校は多くはありませんが、新学習指導要領で言語活動の重視が求められたことによって、今後は増えていくと考えられます。思考力育成に力を入れる高校と連携することによって、大学での思考力の育成も充実していくと考えています」

参加者へのアンケートより — 参加者の皆様を対象としたアンケートに寄せられた声の一部を紹介 —

◎大学教員

- 批判的思考力の考え方は小・中学校の教育でも重視されている。大学独自の課題ではないが、大学生に欠如していることが課題であり、今後十分考慮していきたい。
- 九州歯科大学の事例報告で、校内教員の反応に共感した。本学もFDや初年次教育への賛同者が少ない。取り組みへの関心を高める必

要性とエネルギーがかかることを実感した。

- 結局、思考力を身に付けることは、思考をパターン化してそれが出来るようになるという面があると思った。学生はパターン化された行動をなぞるのは得意ですが、いろいろな場面に適用できる力となるのが懸念される。

◎大学職員

- 初年次教育をいかに充実した内容にするかで、

大学4年間がずいぶん違うものになると再確認できた。入学時の意欲が高い時期に良いプログラムを行うことが重要だと感じた。

- 今まで型にはめることはよくないと考えていたため、型にはめる方法が斬新に思えた。

◎その他

- 今まで初年次教育における思考力育成について考えていなかったため、良い機会となった。